

The Reminiscence of Exellia 蒼天のヴァルマーレ

厳冬の平野

作成レギュレーション

基本概要

- ・経験点：165000 点
- ・資金：318000G
- ・名誉点：1900 点
- ・成長回数：307 回
- ・マジテックトームストーン：戦記 2500 個、詩学 1000 個
- ・アイテムレベル制限：武器ランク S 以上／防具ランク S 以上
- ・ステータスリミット：各項目ボーナス 16（+増強増分 2）まで
- ・レベル：13～14

制限事項

- ・放浪者／蛮族 PC 禁止
- ・バニラ流派入門・秘伝使用禁止
- ・武器防具強化に関する特殊制限
- ・シナリオ報酬成長回数が 10 以上のとき、その 6 割の偏重割り振りの禁止
- ・戦利品判定は振る

その他注意事項

- ・レベル制限逸脱 PC の Lv シンク
- ・ステータス制限逸脱 PC のステータス再振り分け
- ・成長回数制約逸脱時の強制デッドエンド

導入

君達は、シンファクシ家の屋敷にいる。

君達の手が空いているのを見て、マルセルが声をかけてきた。

(※GMメモ：RP待機)

マルセル

「…では、改めて自己紹介を。我が名は、マルセル・ド・シンファクシ。シンファクシ家の長子にして、誇り高きヴァルマーレの衛士だ。先ほどは失礼した…。己に与えられた任務は己の手で…そう考えた故の言葉でな…。貴殿らの実力は、あの男…マティアスから聞いている。ぜひとも、その力を貸してくれ」

(※GMメモ：RP待機)

少し悩んだ様子で、マルセルは言葉を続ける。

マルセル

「…といっても、力を貸す相手は、小憎たらしい『叢嶺家』と『ツェマルド家』なのだな。

四大官家のうち、叢嶺、ツェマルドの両家は、我がシンファクシ家とは、歴史的に対立してきた経緯がある。ライバル関係にあるとえばいいだろうか」

(※GMメモ：RP待機)

マルセル

「今回は、宮内庁からの依頼で、彼らが進めている事業の手伝いをする事になった。

普段から『深海で息を潜める静謀のクソ野郎』と言ってくる奴らに、せいぜい貸しを作ってやるとしよう」

見識判定 目標値：27

成功時、「シンファクシ家」について、他家から「静謀のクソ野郎」と言われていた経緯を、入国前にエクセリアから聞いていたことを思い出す。

(※GMメモ：判定成功時追加演出 ここから)

エクセリア

『…そういえば、シンファクシ家は『静謀のクソ野郎』なんて不名誉な渾名で呼ばれていたな。艦長、それについて何か知っていることはないか？』

トーレス

『我々が代々潜水艦や潜水空母、多目的航空母艦しか取り扱ってないことが、癪に障っているのだろう。』

最も、当代では潜水空母は使えず、多目的航空母艦も、便宜上外様の私が、同盟国への恩売りに使っている以上、彼らが文句を言う筋合いはないのだがな』

(※GMメモ：RP待機)

マルセル

「そんなことまで聞いていたのか。勉強熱心で何よりだ」

(※GMメモ：判定成功時追加演出　ここまで)

マルセル

「…さあ、等護下層に向かうぞ。

任地は、オクシデンス・ヴァルマーレ高地の『隼の巣』…。大鷹留の厩務員に声をかけ、現地までの足を手に入れよう」

(※GMメモ：RP待機)

君達は、大鷹留の職員に声をかけた。

大鷹留の職員

「暗魂の冒険者様でございますね？マルセル様から、お話は伺っております。貴方様のために、とびきりの大鷹を用意しておりますよ」

(※GMメモ：RP待機)

大鷹留の職員

「おや、大鷹をご存じないの？

人を乗せうる大きさの鷹なのですが…特別な訓練により、なんと空を舞うことができるのです。『隼の巣』まで、高壁を超えてひとつ飛び！最初は、ちょっぴり怖いかもしれませんが、緊張なせずに、大鷹での空旅をお楽しみください」

オクシデンス・ヴァルマーレ高地

等護から、西部の山岳地帯を目指して高壁を越えた先。第七霊災により、平時も極寒の領域であるとされる、オクシデンス・ヴァルマーレ高地は、そこにある。

高地とあるが、実際の所は『台地か平地に近い』そこは、等護から切り離されたところにあった。

防衛のための高壁を大鷹により超えた冒険者は、冬であるが故に、更に冷え込んだその地へ足を踏み入れる。

冒険者が降り立ったのは、まさにそのただ中の寒村『隼の巣』であった。

(※GMメモ：RP待機)

雪。

眼前には雪の白がばっちり映った。

それだけに留まらず、猛烈な吹雪に見舞われて、視界が狭くなっている。

(※GMメモ：RP待機)

真っ白な世界を見てしまった君達は、寒さのあまり転がりたくなるやもしれない。
精神抵抗力判定だ。

精神抵抗力判定 目標値：30
成功時 0、失敗時 1 の MP 減少。

(※GMメモ：RP待機)

PC への選択肢

- ・寒い！さぶい！ざぶび！！
- ・なんでこんな時に限って吹雪！？

困惑する君達は、近くにいたマルセルに駆け寄ることになる。

(※GMメモ：RP待機)

マルセルは腕を組んで、「なーんでそんなに寒がっているんだ？」みたいな表情で見ている。

マルセル

「無事に着いたようだ。ここと帝都を行き来するときは、大鷹を使うといい。

ともあれ、ここでは身体が凍る…。

ひとまず、『隼の巣』を指揮する、『景太郎』卿のところに行こうじゃないか」

(※GMメモ：RP待機)

さむい。さぶい。さぶび。そう思いながら、景太郎と呼ばれた衛士のもとへ向かった。

そんなに歩いてはいないのだが、猛吹雪の影響で死ぬほど寒い。

そんな中、景太郎は平気な顔をして立っていた。

景太郎

「ご無沙汰しております、マルセル卿。応援に来て頂けると聞き、お待ちしておりますよ。…ところで、そちらの方々は？」

マルセル

「よろしく頼む、景太郎卿。こちらは、我が家の客人、暗魂の冒険者。

今回の応援要請に対し、力添えをしてくれることになった」

景太郎

「おお、そうであったか！そうかそうか。

私の名は『渚景太郎』、叢嶺家に仕える衛士だ。貴公らの活躍は、我が友、蘆田大臣から直々に聞いているぞ！」

(※GMメモ：RP待機)

マルセル

「我らで、こちらの任務に助力させて頂く。

何を成すべきか、担当を指示して頂けるか？」

景太郎

「うむ。かの《暗魂の暁》の冒険者もいることだ。少し背景事情も含めて説明させてもらおう」

(※GMメモ：景太郎の発言 ここから)

——『第七靈災』以前、このオクシデンス・ヴァルマーレ高地はただの農村にすぎなかった。だが、靈災を期に冬の寒さが増し、夏期でも避暑地レベルにまで温度が下がって

しまった。観光地も寒さにより廃れ、住民たちもここを後にした。かくしてオクシデンス・ヴァルマーレ高地は一種の放棄状態になったわけだが、その結果どうなったか。

このオクシデンス・ヴァルマーレ高地全体が、邪竜フェルニゲシュを崇める異端者たちの根城と化したのだ。

宮内庁がオクシデンス・ヴァルマーレ高地の奪還を決定したのも、活発化の一途を辿る異端者勢力への対処を進めるため。農村である『隼の巣』を要塞化したのも、その足がかりであると。しかし、5年の期間で建築を進めようにも、その寒さが祟って手間がかかっている。

(※GMメモ：景太郎の発言 ここまで)

景太郎

「…応援に来てもらった貴殿らには、『各拠点の建造作業』と『異端者勢力の搜索』…。

この二点について、協力してもらいたいのだ」

(※GMメモ：RP待機)

マルセル

「任されよう、景太郎卿。シンファクシ家の名にかけ、必ずや務めを果たす覚悟だ。何なりと指示してくれ」

組み上げる覚悟

君達は、景太郎に話しかけた。

景太郎

「先ほども説明したが、現在、隼の巣とその周辺は要塞化の途上にある。

築城技術に長ける『ツェマルド家』より、優秀な大工たちを借り受け、建造を進めているが…、正直なところ、作業は難航している。

とはいえ素人にやらせるのも忍びない…。ツェマルド家の親方である『ロス』に聞いてくれないか？」

(※GMメモ：RP待機)

君達は、隼の巣とその周辺を探索するだろう。

探索判定 目標値：29

成功時、「ロス」を発見する。失敗時はぼけーとしていることになる。

(※GMメモ：RP待機)

ロス

「『ロス』親方を探してるだってえ？確かに、それは俺のことだが…」

(※GMメモ：RP待機)

ロス

「景太郎様に言われて、手伝いに来てくれたんかぁ！いやぁ、ありがてえ！

俺は、ツェマルド家に仕えてる大工の棟梁でなぁ。当主様の命で、派遣されてきたまでは良かったんだが、建物が凍り付いちまって難儀してたんだぁ。

どうも氷の精が棲み着いて、悪さしてるみてえだなぁ。『隼の巣』内を、ざっと見回って退治してくれるかい？」

探索判定 目標値：29

失敗時はロス親方搜索時のそれと同じ。成功時は、氷の精（＝アイシクルスプライト）との戦闘。

敵：アイシクルスプライト×8

君達は、アイシクルスプライトを倒して、親方のところに向かった。

ロス

「おう、どうやら退治してくれたみてえだなぁ。あいつら、油断してるとすぐに棲み着いて困ってたのさぁ。兄ちゃん方や、助かったぞぉ。これで建物の凍結も、ちったぁマシになるだろうよぉ。作業も捗るってもんさねぇ…」

(※GMメモ：RP待機)

ロス親方は眠そうにしている…。

ロス

「さてはお前さんがた、かーなーりの手練れだなあ？俺は戦いに關しちゃ素人だが、それでもお前さんがたが、並じゃないことくらいは分かるぜえ。

その腕を見込んで、もういっこ頼みてえことがあるんさあ…」

眠気を堪えながら、彼は君達にやってほしいことを説明する。

隼の巣を出て、暫く北に進んだところに、征竜将の像があるという。その補修を担う石工『ミシェル』の困りごとを解決して欲しい、と。

(※GMメモ：RP待機)

君達は、石工のミシェルの元に向かった。

ミシェル

「冒険者か。ロス親方に頼まれたみたいだが…。私は石工として、この巨大な石像の修繕を任されたんだが、これがなかなかの大仕事でな。

周辺に出没する『ディープアイ』を倒して、『くすんだ剛毛』を3体分、集めてきてはもらえないか？石像の修繕に、どうしても必要なのだ」

(※GMメモ：RP待機)

ここで、魔物のエンカウント条件を定義する。

探索判定は不要であり、PCが1dを振って決定する（ディープアイが3体揃うまで継続する）。

(※GMメモ：1dの結果が「1」ならば、「ディープアイズ・ホワイト・ドラゴン」が出現する。それ以外は「ディープアイ」が1体出現する。

ちなみに「ディープアイズ・ホワイト・ドラゴン」はくすんだ剛毛を落とさない)

(※GMメモ：RP待機)

君達は、「くすんだ剛毛」をミシェルに渡した。

(※GMメモ：RP待機)

ミシェル

「ああ、これだこれ！このゴワゴワとした『くすんだ剛毛』があれば、石像の表面に付着した、煤をこそげ落とせる！

…この石像は、ヴァルマーレの英雄にして、史上初の『蒼の竜騎士』…峯守陽樹様を象ったもの。邪竜の眷族にとっては、目の敵にされる存在のようで、炎のブレスを吹かれたことがあったようだ。おかげで、煤が凍り付いているのだ…」

(※GMメモ：RP待機)

ミシェル

「『征竜将の像』は、ヴァルマーレの民の誇り。これをきれいに磨き上げれば、兵たちの士気も高まる上、何より異端者に、我々が戻ってきたことを示すことも叶おう。

だからこそ、寒く辛い作業であろうと、最高の仕事をしようと思えるのだ」

届かぬ届け物

(※GMメモ：各フレーズRP待機)

ミシェル

「あなた方は、これから『隼の巣』に戻るのだろうか？

ならば、ついでに頼みたいことがある。

実は、お前達が出かけた後のこと、哨戒任務のついでにと、衛士様が様子を見に来てくれたのだ。ところが、忘れ物をしていったようで…」

「彼女の名は、『ルイス』様。西にある監視塔に詰めておられる衛士様で、平民である私などを気にかけて下さる、心優しい者。回り道にはなるが、監視塔に立ち寄り、この『生暖かい包み』を届けてくれないか？」

(※GMメモ：RP待機)

そう言って、君達は届け物をする事にしよう。

(※GMメモ：RP待機)

ルイス

「なに、私が『征竜将の像』に置き忘れた包みを、ミシエルの奴に頼まれて、届けに北だと？」

君達は、「生暖かい包み」をルイスに渡した。

ルイスの気分は駄々下がりになっているようだ。折角の料理がー！

曰くこれはミシエルへの差し入れだったらしく…。後は分かるな？

(※GMメモ：RP待機)

唐突に、ミシエルの前で炊き出しを始めた君達。

届け物の正体に、ミシエルが勘付くのは容易かった。

…それはさておき。

君達は、景太郎のところまで戻ってきた。

(※GMメモ：RP待機)

景太郎

「戻ったか、冒険者一行。『各施設の建造作業』…ロス親方をはじめ、皆のために働いてくれたことを心より感謝する。だが、ゆっくりと礼を言ってはいられない事態が発生してな。どうやら、貴公らの力が必要になりそうなのだ」

殲滅された哨戒部隊

続けて、景太郎が話し始める。

景太郎

「…分かっているようだな。そう、のっぴきならぬ事態が発生したのだ。

北方に、二つの川が合流する場所…人呼んで『リバーズリーチ』という一帯があるのだが、そこに向かった哨戒部隊との通信が途絶したのだ。件の部隊の目的は、異端者のアジトの搜索。異端者の襲撃か、遭難事故か…、現時点では分からないが、冬において極寒のオクシデンス・ヴァルマーレ高地では、小さなトラブルが命取りになりかねない。

我々と協力し、消えた部隊の行方を捜してもらいたい。探索範囲は広範に及ぶため、それぞれ分担しよう。貴公らの担当場所は地図に記しておく…」

(※GMメモ：RP待機)

続けて君達は、マルセルに話しかけた。

(※GMメモ：RP待機)

マルセル

「ふむ。地図を見る限り、我らの担当は『迎合の掘っ立て小屋』周辺のような。
靈災前までは、ヴァルマーレの衛士団が駐屯する、ちょっとした拠点があった場所だ。
二重遭難だけは裂けねばならん。お互い連携しながら、消えた部隊を探すでしょう」

君達は、「迎合の掘っ立て小屋」に向かった。
哨戒部隊の兵士は、既に事切れている。胸元を、鋭利なもので貫かれたようだ。
そこで、ローブ姿の男と対面した。

敵：異端者らしき男×3

君達は、異端者勢力を退けた。

(※GMメモ：RP待機)

マルセル

「冒険者殿、大丈夫か！こちらも異端者の奇襲を受けてな。
…まさか、こうも広く展開していたとは。
…哨戒部隊の兵士は…事切れているようだな…。憎悪からなのか、よっぽど念入りに殺したように見える。何があった…？」

(※GMメモ：RP待機)

足元に、手がかりとして「足跡」があるようだ。
もしかしたら、これを追っていけば…。

(※GMメモ：RP待機)

マルセル

「分かった。無理だけはするなよ？」

そう言って、君達は足跡を追っていった。

足跡追跡判定 目標値：31

成功時、足跡が北へ続いていることが分かる。

君達は、風雪に見舞われながら、足跡を追跡した。

敵：アイストラップ×1

君達が足跡を追う先で、再び敵が現れる。

敵：異端者×4

君達が異端者を撃退すると、その内のひとりが口を開く。

異端者

「牧場を征け…」

探索判定 目標値：31

君達は、牧場を見つけた。

中に入ると、そこには祭壇のような場所があった。

言い得ぬ迎合

君達は、祭壇のような場所がある、その牧場の地下を見渡した。

(※GMメモ：RP待機)

そこへ、軽い足音が響く。

その姿を捉えた君達は、武器を抜くことになるだろう。

異端者の長

「この私を、狩りに来たと言うのか…？」

構え続ける君達の横に、空間を裂いて…顕現状態のリーンが姿を現す。

リーン

「わ、私じゃなくて、私が使う力が、ここを指し示したから…」

異端者の長

「…その力は…、まさか！？」

その時、空間に響き渡る声がある。

シヴァ

『汝らには聞こえているな？この娘をここに連れてきたのは、私が真実の一部を伝えるためだ』

リーンの口は動いていない。文字通り、脳に直接、声が響いている。
というか、リーンが混乱している。

(※GMメモ：RP待機)

シヴァ

『私の名は…言うまでもなかろう。北方に伝わる伝承の片鱗が、力を持って現出したもの…。今は彼女にその|魂《み》を寄せている。我が夫フレースヴェルグの密命により、彼の竜から一旦離れ、彼女にその力の一端を与えているにすぎない』

リーンはぼかーんとしている。何が起きているのか全く理解していないようだ。

シヴァ

『…しかし、汝らは同じ力を持ちながらも、随分と違う道を歩んできたようだな…。
…おい光の巫女、いい加減だんまりするのをやめろ？』

リーン

「いや…、何を言っているのか、まるでさっぱり分からないから…」

(※GMメモ：RP待機)

シヴァ

『憑依先の阿呆加減は咎めないとして、だ。お前に宿る氷の力は、我が夫から過去視した末に見出したものだろう？お前なりの解釈が入ってしまっているはずだ。

最も、憑依先に宿る|力《シヴァ》は、あくまで『氷の神が仮に存在するなら』という定義の上に成り立っているが故に、魂を汚染し得なかったのだが…。お前は、どうだ…？』

そう言った声の主は、異端者の長に問いかけている。

異端者の長

「その通りだ、光の戦士よ。私は、あなたと同じ『超える力』を持つ者。

最初は、幻のように現れる過去の情景を前にして、意味も分からず怯えさえした…。

5年前の『第七霊災』…、そこに君達も立ち会ったのだろう？その時、私は…」

リーン

「環境が激変して、冬場の寒さがおかしくなった、でしょ？」

(※GMメモ：RP待機)

リーン

「それぐらいは書物に流れてきているから。それで…あなたはなぜ、私の力に『真実の一部を知っている』と言われているのかな？」

そう言って、リーンは彼女に問いかける。

異端者の長

「…家族を失ったのだ。避難中に、両親を…」

(※GMメモ：RP待機)

異端者の長

「寒さに追い立てられ、邪竜の眷族に襲われるのを承知で、西方の霊峰、山門山へと逃れたのだ。そして、彼の地で私は出会った。偉大なる『七大天竜』の一翼、聖竜フレースヴェルグに…」

それをどう解釈するかは、君達に委ねるとしよう、と彼女は語る。

しかしリーンは、そのおかしさに目をつけていた。過去視でシヴァを視たのか、あるいはフレースヴェルグを視たのか、それとも両者を視てそう感じたのか…。

その辺りが判然とせず、熟考していた。

シヴァ

『おい、光の巫女。何を長々と考えている？』

(※GMメモ：RP待機)

シヴァの指摘を受けても、リーンはただ情報を吟味していた。

現在、「聖女シヴァ」の魂は、フレースヴェルグの密命により、己に宿っている。というより、居候をしている。それは、今朝、力の修練目的で降ろしたときに、たまたま着いてきたから分かったことだ。

では、目の前の…異端者の長は、一体全体、何を『視た』というのか？

これを、安直に言うなら…

リーン

「私のはもう、偽物だと分かっているからいいんだけど…それ、本物？」

帰宅

君達は、色々とあった後に、リーンと共に等護のシンファクシ家の屋敷に戻った。

(※GMメモ：RP待機)

リーンに降りた力は、既に解かれている。しかし、リーンは露骨に顔をしかめている。

リーン

「惚気を私の頭の中で話さないで欲しいんだけどなあ」

(※GMメモ：RP待機)

偽物の力に、本物の魂が宿ってしまい、混乱しているようだ。

リーン

「『超える力』かなんかでツッコミ入れてほしいくらいですよ！もう！！」

PC への選択肢

- ・…シヴァ、ステイ
- ・そんなに惚気てもリーンが困るだけだよ

(※GMメモ：RP 待機)

シヴァ

『…むう、ならば仕方ない…』

そう言って、シヴァはいずこかへと去って行ったようだ。フレースヴェルグのもとに戻ったのだろうか…。

それと同時に、安堵のあまりぶっ倒れるリーンの姿があった。

そこへ、マルセルが声をかけてくる。

マルセル

「今回の件、改めて礼をさせて欲しい。…そして、ひとつ謝っておきたいことがある。

実のところ、島嶼は貴殿らのことを侮っていたのだ。実力を高く評価し、客人として招くことを推薦したのが、あのマティアスだったのだからな…。

マティアスは、私の弟なのだ…腹違いのな…。実直な父が犯した『唯一の過ち』の結果だと人は言うが、父は私生児である彼を捨てず、機工士として育てた。

勿論、今は亡き私の母は、最期まで彼の存在を認めなかった。その心が、私にまで伝わっていたのだろう」

(※GMメモ：RP 待機)

マルセル

「『奴の目は曇っている』、その考えがつまらないことだと思い知ったよ。他の遭難者の搜索という『楽な任務』を選んだ私に対し、貴殿らに単独追撃という『辛い任務』を押しつけてしまったのだからな。だというのに、それを断らぬばかりか、見事成し遂げた貴殿の姿は…、確かに、マティアスが推挙した言葉の通りだった…」

感謝を述べて、マルセルはその場を後にした。

報酬

基本要素

- ・ 経験点：5000 点
- ・ 資金：20000G
- ・ 名誉点：100 点
- ・ 成長回数：9 回

マジテックトームストーン

- ・ 詩学 250 個

その他

- ・ マジテックトームストーン：戦記交換券

マジテックトームストーン：戦記を、1 個あたり 50 ガメルで購入できるようになります。